
どくんどくん3 ~僕達の道標~

reY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どくんどくん3 ～僕達の道標～

【Nコード】

N1600C

【作者名】

rey

【あらすじ】

『どくんどくん』の完結編です。1、2と読んでもらってから、読んでいただけるとわかりやすいかと思えます。今までの集大成と思い、頑張って書いていきますのでよろしくお願いします。

第1話（僕らの上にある笑顔）（前書き）

1と2を読んでいたから、読んでもらえると嬉しいです。感想お待ちしています。

第1話（僕らの上にある笑顔）

入道雲の間から、ぐんぐんと延びる飛行機雲。

迷う事なくまっすぐに進むその雲に、懐かしい笑顔が重なる。

「もっと長くできないのかな？」

「いいよ。そんなに長いと緊張するし、短くていいの。」

「ダメだよ！ユキはわかってない。バージンロードは父親にとっては、娘が生まれてきてからの思い出を思い出しながら歩く大事な道なの。」

バージンロードの長さで僕とユキの意見が食い違う。

僕は、ユキとお父さんを少しでも長く歩かせてあげたい。
いろいろあった親子だから、よけいにゆっくりと歩いてほしいとい
うのが僕の願い。

こんなに早くに娘さんをもらってしまう僕からのせめてものお父さ
んへの償いの気持ち・・・。

その式場では、それ以上長くできないとの事で僕はがっくりと肩を
落とす。

僕は、まだ21歳という若さだが、運命の相手との結婚を決めた。
彼女以上の女性はいないと、出逢ってすぐに気付いてしまった。

「ねえ、お腹減った……。ケーキ食べない？」

「はいはい。いつものモンブランだろ？」

ケーキが大好きな僕の彼女は、結婚式の準備がとても楽しいようだ。

彼女の名前は、春瀬ゆき。

そして……。もうすぐ『神宮司ゆき』になるんだ。

僕は、神宮司ハル。

世界一の幸せ者だと毎日のように感じながら生きている。

地球の長い歴史から見れば、僕とユキの歴史なんて、ほんの一瞬か
もしれない。

高校で出逢った僕らは、大事に大事に愛を育ててきた。

少し早いと言われるかも知れないけど、僕らは次の春に結婚する。

この結婚を誰よりも喜んでくれた人がいる。

僕らのことをいつも見守ってくれる優しい友。

彼は、毎日僕に語りかける。

。 雨上がりの虹のように、曇り空から差し込む一筋の光のように・・・

彼のことを考えない日はない。

彼は、自然にそこにいる。

僕らの上において、僕らを照らし、僕らを導いてくれる。

彼の歌は、今も多くの人々の心に響く。

彼の声は、永遠に僕らの心の中に残る。

なあ、ゆうじ。

そっちの世界は、笑顔が溢れているのかい。

人々は、幸せそうに笑っているかい。

お前が夢見てた、笑顔の絶えない世界は見つかったかい。

辛い時こそ、笑顔で前を見て歩く。

ゆうじから教わった生き方。

彼は、急ぎ足で天国へと旅立って行った。

でも、彼は言う

「寂しくなんかないよ。いつでも僕はそばにいるよ」

『Spring Snow』としてデビューした僕の幼なじみのゆうじと大野君はまだまだこれからだった。

着実にファンを増やし、人気が出て来た矢先のゆうじの休業宣言。

そして、戻ってくると信じてたファンを残してこの世を去った。

あまりに早い死を、誰もが受け入れられずにいた。

入院中、一番辛かったはずのゆうじは決して弱音を吐かず、辛い顔をしなかった。

人の悲しい顔を見る事になによりも苦手だったゆうじ。

みんなを残して死んでしまったことは心残りだっただろう。

僕はゆうじとの思い出をいつも思い出した。

ゆうじの笑顔が色褪せないように、何度も何度も頭の中に焼き付け

た。

「またしんみりしちゃって・・・ゆうじ君に怒られるよー!」

大好きなモンブランを頬張りながら、僕の手に触れるユキのぬくもりで僕は現実に戻る。

「そうだな。もうすぐ追悼ライブだしな。あいつも楽しみにしてるだろうな・・・」

「うん!! やつとライブ実現するんだもんね。」

夏に予定されていたゆうじの追悼ライブは、秋に延期になった。

ゆうじの残した曲は、あまりにも多かった。

ゆうじの書き残した歌詞は、想像以上の量と質だった。

大野君は必死で、ゆうじの想いを受け止めようと努力した。

でも、歌詞を読むと涙が止まらなくなり、練習ができなかったと大野君は話してくれた。

純粹で天使のような素敵な歌詞は、僕の手には負えない、と大野君は泣いた。

彼もゆうじという大きな存在を超えなければならなかった。

ゆうじの歌を歌うということの喜びと、自分にそれを歌う資格があるのかという苦しみにも似た気持ちで、大野君を追い詰めていたのかもしれない。

もう追悼ライブはできないと言った夜、大野君はゆうじからの手紙を見つけた。

「僕が死んでしまつたら、このノートは大野君の物です。捨ててくれても構わない。大野君が幸せになることが僕の願いだから、大野君の決めた道に進んでほしい。最後まで、迷惑ばかりの僕だけど、これからもよろしく！」

大野君は、涙を拭いて、大きな第一歩を踏み出す決心をした。

泣いてなんていられない。

ゆうじの意思を継いで、歌い続けるのは自分しかいないんだと、大野君は走り始めた。

秋に行われるライブでは、映像でゆうじを映し出し、その横で大野君が歌うという不思議な構成になるらしい。

今まで通り2人の歌を聞くことができることはとても嬉しい。

でも、そこにいるのは映像のゆうじ……

それは、僕らにとって嬉しいような悲しいようなとても複雑なライブになることを予感させた。

動いているゆうじ、歌っているゆうじを見ることで、まるでゆうじがそこにいるかのように感じるのだらう。

しかし、ゆうじはそこにはいない。

「いっぱい泣こうね。」

ユキは、僕の心が読める。

僕とユキは、少し涼しくなった夏の終わりの夜道を手をつないで歩いた。

第2話（夏の終わり）

もうすぐ夏が終わる。

僕は夏の終わりが一年で一番切なくなる。

小さい頃からそうだった。

夏休みが終わるせいかもしれないが、夏の終わりは胸が苦しくなる。

夏の思い出たちが、僕に向かってバイバイしているようだった。

夏休み、自転車でトンネルの中を走った中学時代。

トンネルを抜けると、別世界が広がっていた。

顔を見合わせてみんなで大笑いした。

みんな顔が排気ガスで真っ黒になっていたっけ。

河原で花火をしたあとに、誰かが服のまま川に飛び込んだ。

そのまま全員がびちよぬれになった。

服のまま川に入ったのは、あれが最後だった。

置いてあった原チャイに乗り、風に吹かれたときのあの気持ちよさを僕は忘れない。

あの日の夜空の星も、あの橋からの景色も、あのキラキラした気持ちも。

いつのまにか、やんちゃもしなくなり、少しずつ大人になる。

大人になることと、秋に近づくことって似ている気がする。

夏の思い出は、なぜが馬鹿騒ぎして大笑いして、羽目を外した思い出ばかり。

秋になると、夏の後片付けが待っていた。

友達の1人は、夏に海で出会った彼女との関係を終わらせるために学校を休んで謝りに行った。

夏にしたやんちゃがばれて、先生に怒られるのもこの季節だった。

夏の日焼けが少しずつ薄くなることが、切なくて寂しくて胸がキュンとした。

日焼けの跡が消える頃には、夏が思い出になる。

この夏のこと僕は一生涯忘れないだろう。

ユキとの夏

結婚式場の下見や、ウエディングドレスの試着、新婚旅行の計画。

どれもこれもが、今しかできない貴重な体験だった。

初めて試着した新郎の衣装を着た時のあの恥ずかしさ。

美しすぎるユキのウエディングドレス姿に、見とれてしまったっけ。

並んで写真を撮られて、言われるがままにポーズを取ってた。

結婚式の料理や、テーブルの花、テーブルクロスの色から柄から・
決めることは山ほどあるのに、なぜかウキウキして楽しい時間だった。

式の半年前には、きっと完璧に全てが決まっていることだろう。ウエディングプランナーさんは、あまりの早さに驚いていた。

社会人と違い、平日も時間の作れる学生の強みであろう。

学校の方も、落ち着いてきた為僕はバイトを始めた。

今までのバイト経験というと、高校時代にちよこつとした小遣い稼ぎの為にサツカーのコーチをしていたくらい。

バイト イコール コンビニ という僕の勝手な思い込みで、家の近くのコンビニで働き始めた。夕方の4時から夜8時まで限定で、ユキとの時間にも差し支えない。

バイトから帰ると、エプロン姿のユキが僕を玄関で迎えてくれる。

おかえり〜と小走りで僕に抱きついてきて、おかえりなさいのチュウする瞬間が幸せ。

結婚生活が始まって、こんな幸せな毎日が僕を待っている。

結婚したらおしまいだ、なんて言う人も多いけど、僕にはそうは思わない。

幸せな夫婦って思っているより多いんじゃないか。

実際僕の周りを見ても、僕の両親といい、水野さんといい、寛太の

所も仲が良い。

結婚って僕には、とても素晴らしいものだって思うんだ。

ユキと2人で、結婚準備に忙しくしたこの夏を僕は一生大事にした
い。

そして、いつか子供が生まれたら話すんだ。

「ねえ、ハルもちゃんと考えてよ!!」

ユキにほっぺをつねられた僕。

「ごめんごめん。もう夏も終わりだなんてしみじみ考えてたんだ。」

「もう、ハルはしみじみが好きなんだから……。入場曲は、絶対コレが良いと思うんだけど、どうかな?」

結婚式でかける音楽を決めるといって、最終段階に入った僕らの結婚準備。

ユキが入場を選んだ曲は、ディズニー映画の曲で何度か聞いたことがあるような素敵な曲だった。

「うん。いいね。なんか泣きそうな曲だな……。僕やばいかも。」

「え〜?入場から泣くの?ハルが泣くから、入場はゆうじ君の歌やめたんだよ。」

「そうなの?でも、入場以外ほとんどSpring snowじゃ
ん。」

「両親への手紙の時の歌は、もちろん『絆』だからね。」

ゆうじが、ユキとユキのお父さんの為に作った歌が『絆』だった。

僕や、ゆうじの周りの人々の生活にあいつの歌は必要不可欠。

ふとした瞬間に聞きたくなる。

「ねえ、ユキ。今更だけど、このまま僕一人で決めちゃっていいんだよね？」

僕は、以前水野さんから聞いて不安になっていたことを切り出す。まさか、やっぱりハルだけじゃ嫌！なんて答えが返ってくるはずもないんだけど……。

「どうしたの？ハル？大丈夫？」

ユキは僕のおでこを、そつと触る。

「水野さんに言われた事があるんだ。最初に付き合った相手と結婚できるのは素敵なことだけど、お互いに相手しか知らないっていうことに不安を抱くときが来る……って。」

ユキは、首を傾げて間の抜けた顔で僕を見る。

「ん？？？どういうこと？私に、いろんなオチンチンを見ろってこと？？」

僕は、失笑してしまった。

「ま、まあ・・・単刀直入に言えばそうかも知れないけど・・・。他の男ってどんなんだろうって思ってしまう時があるんじゃないかってことかな？」

「もし、そんなこと思う時が来たら・・・それはハルの責任じゃん？ハルが今のままいい男でいてくれたら、そんなこと有り得ないよ・・・！！」

ユキは、プツッと膨れた顔をして冷蔵庫へ飲み物を取りに行った。

オレンジジュースの入ったグラスを2つ持ちながら、僕の隣に座る。

「ハルは？」

もしかして、少し不機嫌？

ユキは、鋭い視線で僕を見た。

「僕は、その場で水野さんに言ったよ。有り得ないって！！僕にとって、ユキが唯一の存在なんだ。ユキ以外なんて・・・しかも、気持ちのない行為ほど空しいものはないって思う。だから、風俗とかにも興味ない。」

ユキの鋭い目にびびった訳ではないのだけど、僕は熱く語ってしまった。

「ふ〜ん・・・そっか。良かった。しかも、私がハルしか経験ないってどうしてわかるの？」

・・・???

思わぬ発言に眩暈しそうになった。

「え?????どういう意味?僕が初めてだよな?」

「くくくく・・・冗談だよ。ハル、かわいいねえ。」

ユキは僕の髪をくしゃくしゃにしながら笑った。

「マジで????タケと・・・何もなかったよな?」

僕は、恐る恐る聞いて見たが、ユキは目をそらしてトイレに行ってしまった。

これは、何かある。僕はそう感じ、トイレの前から叫んだ。

「おい。ユキ!!時効にしてやるから、話してみろ!!」

「エッチ!!おしっこの音聞こえるからあっち行って!!」

「嫌だ!!話してくれるまで、ここ動かないから。」

僕は、内心すごく不安だった。

時効だと言ったけど、もしタケと何かあったとしたら、僕はショックで泣いてしまうかもしれないと思った。

「・・・ハルと連絡取れなかった時に、私学校で泣いちゃったの。車の免許の合宿なんて知らなかったし、もう嫌われたのかと思って。」

「・・・」

「うん・・・。それで？」

「その日に、タケが家まで送ってくれて・・・泣くほど辛い恋愛ならもうやめろって言われたの。俺じゃ、代わりになれないか？って。私、タケの事は友達としてしか見ることでできないって言ったんだ。・・・そしたら、キスされたの。これで、男として見れる？って・・・」

「・・・キス・・・か。アイツ・・・ムカつく・・・」

キスだけで終わってくれと祈っていた。

「その時に、私わかったんだ。私はハルしか嫌だつて！好きじゃない人とのキスがこんなにも嫌なものだつて知らなかった。ハルとのキスは、あんなに幸せなのに、タケとのキスは辛くて涙が出た・・・そのまま走って車を降りた。ごめんね・・・」

「・・・そか。話してくれてありがとな。無理矢理されたんだから、ユキは悪くない。泣かせた僕が悪かったんだ・・・」

ガチャ・・・

トイレのドアが開いて、ユキが僕に抱きついてきた。

「ごめんね、ハル。一生ハル1人の私だから・・・」

「僕もユキだけの僕だよ。」

「絶対浮気しないでね。浮気したら、私・消えるよ。」

僕は、トイレの前でユキを抱きしめて、キスをした。

何度も何度も夢中でキスをした。

頭に浮かぶタケとのキスシーンをかき消すように……。

第3話（思わぬ誘惑）

今日でコンビニのバイトを始めて1週間が過ぎた。

学校でも職場でも、何でも最初は不安なものだ。

人見知りしない僕でも、やっぱり慣れるまでは神経を使って疲れる。

やっと、レジ打ちも人並みのスピードでできるようになった。

季節先取りの肉まんの温め方も覚えた。

ただ、未だに苦手なのは宅急便。

箱の大きさを計り、送り先の住所からコードを入力するというややこしい作業が嫌い。

箱を持ったお客さんが来ると、冷蔵庫に逃げ込みたくなる。

冷蔵庫とは、ジュースやビールを後ろから入れる部屋で、とても寒い。

夏だったら、気持ち良かったんだろうな。

「じゃあ、行ってくるね。退場の曲考えといて。」

僕は、玄関で寂しそうに僕を見送るユキにキスをした。

「退場の曲は、もう決まってるの。」

ユキは、嬉しそうにそう言つと、笑顔でバイバイした。

このときはまだ僕は知るよしもなかった・・・

軽い気持ちで始めたこのコンビニのバイトが僕とユキの間に微妙な溝を作ってしまうことを。

「お疲れ〜っす。」

僕は3分遅れで、コンビニへ到着した。

「遅い！！じん君たるんでる！！！」

僕の時間の前にいつも入っているバイトの先輩が僕の背中を叩く。

この人は、僕より2つ年上の女性で、なぜか僕を『じん君』と呼ぶ。慣れないその呼び名に、戸惑いながらも新鮮さを覚えた。

「すみません・・・さゆりさん。明日は5分早く来ます。」

バイト仲間がみんなそう呼んでいたので僕も彼女を『さゆりさん』と呼んでいた。

コンビニには似合わない上品なさゆりさんだが、ここのバイト歴は長くみんなから慕われていた。

近くに1人暮らしをしていることと、英語が話せること以外僕はさゆりさんについて知らなかった。

僕のバイト初日に、外国人のお客さんの対応をしている姿に僕は見とれてしまったんだ。

流暢な英語と、自然な笑顔がこの店にはもったいない。

「じん君、からあげ食べたい。揚げて！」

さゆりさんはいつもこんな調子で、わがままなのか僕の教育なのかわからないが、僕の苦手な仕事を頼む。

「あゝ！！ほら、また揚げすぎ。キツネ色って言ったでしょ？キツネ知らないの？」

さゆりさんは、年上ということもあるけどかなりSっぽい人だ。

さゆりさんが帰るまでの10分程のこの他愛もないひとときに心地よさを感じる。

・・・と言っても、別に恋心を抱いているわけじゃない。

ただのバイトの仲間の一人として。

僕のバイトの時間の前にたまたま働いている先輩として。

「ただいま〜！つかれた・・・。」

僕は玄関でユキに抱きついて、バイトの疲れを癒す。

「お帰り。ハルの好きなカレーだよ！」

ただいまのチューは、うがいをしてからって決まりがあるんだ。僕は、いつものようにうがいをして、甘えるようにキスをした。

「聞いてよ。今日もさゆりさんにいじめられたんだよ。からあげの色が悪いつて。キツネ色ってどんな色だよな??」

「あははは。また??こないだもからあげの事で怒られてたよね？」

ユキは僕の頭をよしよししながら、優しいキスをくれる。

「なぐさめてよ、ユキ。」

「ご飯食べてからね。」

思えば、僕はバイトから帰るといつもさゆりさんの話をしていたかもしれない。

それは、バイト先でその日会つのが店長とさゆりさんだけだったからなだけだ。

僕の後の時間は決まって店長だったから、店長とは顔を合わすが敵しい人であり好きではない。

「ちょっと!!!じん君。あんなめてるでしょ、あたしのこと!!!」
また5分遅刻した僕の背中をバシバシと叩くさゆりさん。

「これからは遅れる時連絡くれる?迷惑なの!!!メールアドレス教えて!」

僕はこの時、とても自然に何のためらいもなく、さゆりさんに携帯番号とメルアドを教えていた。

これが、さゆりさんの作戦だったのか、本当に僕の遅刻が迷惑だったのかはわからない。

僕は、学校でも携帯番号やメルアドは必要な数人にしか教えていない。

特に女の子には、はぐらかして教えないようにしていたはずだけど・・・。

さゆりさんのあまりにも自然な誘導で僕はスラスラと教えてしまった。

さゆりさんが帰った後すぐに僕の携帯が鳴った。

『もしもし?これ、あたしの番号だから、ちゃんと登録して。』

僕は言われるがままにさゆりさんの番号を登録した。

その時に気付いたことは、僕の携帯のメモリーには女の子ってほとんどいないってこと・・・。

だからって訳じゃないが、僕は運転中とかトイレ中とか、自分が携帯に出られない時にユキに代わりに出てもらったりしていた。お風呂に入ってる時なんて、僕にかかってきたシンからの電話にユキが長電話してることもある。

さゆりさんからかかってくることなんて・・・ないよな？
大丈夫だよな・・・。

僕は、バイト中何度も携帯を見ている自分に気付いた。

さゆりさんからのメールを待っている自分に気づき、僕は冷蔵庫に駆け込んだ。

自分の顔を何度も叩いた。携帯を鞆の奥へと押し込んだ。

僕はさゆりさんに対して特別な感情を抱いていたわけじゃなかった。ただ、今までユキ以外の女性で魅力的だと感じる女性に出会ったことがなかった。

僕が出会った初めての、ユキ以外で素敵だと思える女性・・・だった。ユキへの気持ちが一〇〇だとしたら、さゆりさんへの気持ちなんて一にも満たない。

でも、今まで一どころか〇・一もそんな気持ちを感じたことがなかった為に僕は罪悪感でいっぱいだった。

バイトが終わってから、携帯を見ると二通のメールが来ていた。

一通は、ユキからで・・・もう一通はさゆりさんからだった。

ユキのメールを読む前に、さゆりさんのメールを読んできましたことを僕は後悔した。

じん君、バイト終わる時間にコンビニの前に行くからあげ揚げて持ってきてね

いつもの口調とは別人のようなかわいいメールだった。

僕は、どうして僕の終わる時間にさゆりさんが来てくれるのかわからなかったが、そのメールを見た後、僕の胸が高鳴るのを感じた。

そして・・・僕はもう一通のメール、ユキからのメールを読むのも忘れ、からあげを揚げに行っていた。

「あれ？どうしたの、お前。もう上がっていいぞ？」

店長は、私服で戻ってきた僕を見て、不思議そうな顔をした。

「ちょっと・・・からあげ揚げる練習していいですか？」

僕は、バイト熱心な優等生だと思われたらう。

店長が接客している後ろで、こっそりから揚げを5つ頂いて、店の前へ急いだ。

「遅い〜!!!」

そこには、いつもと違う大人びたさゆりさんがいた。

ワンピースにクルクル縦巻きした髪型で、座っている彼女は僕を見上げて笑った。

「今回のから揚げは、満点ですよ！」

僕はいつも通りに話そうと思ったが、あまりのギャップに目を見れずにいた。

さゆりさんは、座ったまま口を開けた。

「あ〜んしてよ。」

僕はその時、すっかりユキのことを忘れてしまっていたのかもしれない。

ユキ以外の異性とこんな風に接することが初めてだったせいで、僕はこれが恋ではないかと思うくらいにドキドキしてしまっていた。

僕は、爪楊枝がない事に気付いた。

手であげをつまんで、さゆりさんの口へ運ぼうとした時だった。

勢い良くから揚げに食い付いたさゆりさんは僕の指まで……

「じん君の指食べちゃった〜!!」

これがもし作戦か、男を落とす手段なのだとしたら、この人はすごい人だと思った。

僕は、それが自然のさゆりさんの姿であって欲しいと願った。

僕もしゃがみ込み、2人でから揚げを食べた。

「薄暗いから、キツネ色かどうか見えないから不合格〜!!」

さゆりさんはそう言って、尻餅をつく大笑いしてた。

「今日のは、絶対にキツネ色ですって!!」

僕は、さゆりさんに早く褒めてもらいたいと思っていることに気付いた。

まんまと、さゆりワールドにハマってしまっているのか？

「うそだって!!合格!!よくできました、じん君。ごほうびに何欲しい？」

いつの間にか体育座りをしているさゆりさんは、膝の上に置いた腕に顔を乗っけて僕を見つめていた。

バイト中の顔とは明らかに違う種類の顔をしていた。

恥ずかしがることもなく、瞬きもせず僕の目をじっと見つめていた。

.....

.....

僕は、咄嗟に立ち上がり我に返った。

一瞬、僕とさゆりさんは熱い目で見つめあってしまった……。

あの目は、普通の目じゃなかった。

僕に何かを言わせようとしている目。

僕は、こんな気持ちになっっている自分が許せないと思いつつも、さゆりさんへの興味が膨らんでいくことを止められなかった。

「からかわないでくださいよ。」

僕は、平静を装いながらそう言ったが、僕のこのドキドキをさゆりさんに気付かれているような気がした。

さゆりさんに、手を引っ張られ……僕はまたしゃがみ込んだ。

さゆりさんの視線が僕の左半身を硬直させていた。

できるだけ、さゆりさんを見ないように前を向いていたが、かすかに映るさゆりさんを意識せずにはいられなかった。

「もう1個ちょうだい。」

さゆりさんの言葉に、僕はから揚げをもう一つ口へと運ぶ。

今度は、僕の指に唇が当たることにはなかった。

その時、少しがっかりしている僕に僕は無性に腹が立った。

・・・

その時だった。

コンビニの前の道を歩くユキの姿を見つけた。

僕がユキを見つけると同時に、ユキは僕の隣にいるさゆりさんを見つけた。

・・・

僕とさゆりさんを・・・見つけた。

その時の僕は、明らかに動揺していただろう。

それは、心の中にほんの少し芽生えた『恋心』のせい。
ユキに見透かされたような気がした。

そのまま、ユキは何事もなかったかのようにクルッとまた来た道に戻って行った。

僕の異変に気付いたさゆりさんが、ユキの方を見ながら言った。

「彼女？じん君、追いかけていないの？誤解したよ、明らかに。」

僕は、さゆりさんに「ごめん」と一言言うと、ユキに向かって走っ

た。

どうして、ユキの姿を見てすぐに追いかけなかったのだろう。

さゆりさんに言われて、追いかけるなんて・・・僕は最低な男だ。

第4話（後悔）

「待つて!!!.....ユキ!!!!!!」

僕は細いユキの腕を掴んだ。

「いいよ。家で待つてるから、戻りなよ。」

ユキは僕の顔を見ようともしなかった。

「ごめん.....バイト終わって、から揚げの練習してたんだ。それで、あそこで食べてただけだよ。」

「.....あれがさゆりさん？ 綺麗な人だね。勝手な想像だけど、さゆりさんっておばちゃんだと思ってた。」

ユキの声は、今にも泣き出しそうな弱々しい声だった。

「ごめん.....誤解させるようなことして.....」

「もういいよ。来なきゃ良かったね。来なきゃあんなハル見なくて済んだのにね.....今日は、実家に帰る.....ごめんね。」

「ちょっと.....待てよ。ちゃんと仲直りがしたい。」

「.....ごめ.....ん。明日の夜、また話そう。今日はハルとは、一緒にいられない。あんなに嬉しそうに話すハル.....誤解だっ言っても私にはわかるよ。」

ユキは、目に涙を溜めながら、作り笑顔で僕を見た。

「誤解だつて！！ほんとに・・・」

コンビニの灯りと、時折通る車のライトだけの暗さの中、僕は必死にユキの目を見た。

「ハルが誰と話してるかわからなくて、歩きながらずっと見てたんだ。そしたら・・・さゆりさんに、何か食べさせてあげてたよね？ ・誤解かどうか知らないけど、私の目に見えたものは事実だから・・・今日は、本当に・・・これ以上ハルの顔見たくないから帰る！！」

ユキは、顔を真っ赤にしながら涙を拭りながら一気に気持ちを吐き出した。

もう僕が何を言っても、嘘にしか聞こえないだろう。

「待って！！送るよ、車で！」

僕の声は、すれ違う車のエンジン音に消されたように、ユキの心には届かなかった。

ユキは、そのまま駅へと走り去った。

ハルノカオミタクナイ・・・

ユキの言葉が胸に突き刺さる。

当たり前だ。

さゆりさんは、どう見てもコンビニの仲間という雰囲気ではなかった。

特に今日のさゆりさんは、夜なのにどうしてそんなに気合入れているのかと思う位だった。

その理由は、コンビニへ自転車を取りに行った時知る事となる。

「じん君、フラれてやんの〜!! なくさめてあげよっか? ふふふ。」

さゆりさんは、僕を元気付けてくれようとしてるのか、本当に楽しんでるのかわからないようなハイテンションだった。

「……もう僕帰ります……。また明日。」

僕は、頭の中が整理できないまま自転車に鍵をさす。

「なぐんだ。もう帰るの? あたしに会いたくなったらここにきて!」

そう言って、さゆりさんが差し出したのは……名刺だった。

僕はそのへんの事は詳しくないのでわからないが、キャバクラなのか、風俗なのか。

明らかに、夜の香りのする名刺を受け取った僕は、そこに書かれた名前を見た。

『さゆり』

「さゆり……って本名じゃなかったの？」

「本名な訳ないじゃん。あたし指名しに来てよね。じゃねー!」

僕を残し、高いピンヒールで走り出したさゆりさんは、あつと言つ間に夜道に消えていった。

「はあ……」

僕は、頭の中がぐちゃぐちゃで、混乱していた。

ユキとのことをどうしようかと悩む僕の脳に、さゆりさんの名刺がぐるぐる回って僕の脳をかき乱す……。

僕は、真っ暗な部屋の鍵を開ける。

部屋の中には、いい匂いが漂っていた。

僕の大好物、クリームシチューが鍋の中で悲しそうにしていた。

さっきまで着けていたエプロンは、戻ってくるはずのユキを待っているようだった。

僕はその時・・・ハツとした。

思い出した・・・。

僕は慌てて、携帯を取り出した。

バイトが終わってから、ユキからメールが来ていたことを思い出した。

僕はさゆりさんからのメールを先に見て、そのままから揚げを揚げに行き・・・ユキのメールを忘れていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

おつかれさま。日記を見て思い出したよ〜！今日は2人の付き合い記念日 駅前のケーキ屋さんにケーキ買いに行こうと思うので、バイト終わる時間にケーキ屋さんで待ってるね。ハル、だ〜いすき！〜！

僕は、なんて馬鹿な男……。

そのまま、床におでこを付けて僕は泣き出した。

ユキ。

ユキ。

ごめん、本当にごめん。ユキ……。

泣きながら、僕はコンビニでバイトをしたことを後悔した。

初めて芽生えてしまったかもしれないユキ以外の女性への淡い恋心。

僕は、それを封印するしかないことはわかっていたが、自分に自信がなかった。

時間が戻って欲しかった。

。僕が、ユキ以外誰のことも興味がなかった、ほんの10日前に……。

その夜、ユキにメールも電話もしなかった。

何を言っても言い訳にしかならないと思ったから。

メールを見ていなかったことは事実だけど、見なかった理由はやはり僕にある。

ユキからのメールをなぜ先に見なかったのだろう。

ユキからのメールを先に見ていたら、僕は急いでケーキ屋さんに向かっていただろう。

夜中に目が覚めて、僕はユキの言葉を思い出す。

何日前にトイレの前でユキが言った『浮気したら、私消えるよ』

僕は、怖くなってユキの携帯に電話をしようとした。
時計はもう深夜の3時を回っていた。

とりあえず、明日の朝まで待って電話しよう。

僕の一番大事な人は、誰なんだ・・・ハル？

僕は・・・ユキを愛している。

ユキと結婚するんだ。

僕は、ユキ以外の人と生きていくなんて考えられない。

ユキが好きだ。

なのに、夢にはさゆりさんが出てきた。

さゆりさんは、夢の中で僕を誘惑した。

僕にはユキ以外の恋の免疫がない。

だから、こんな少しいことで風邪を引いてしまうんだ。

時間が経てばすぐに治る。

ちよっと新種のウイルスが僕の周りに飛んでいるだけだ。

また、いつもの僕に戻る。

第5話（突き放せない存在）

目覚めてすぐに、僕はユキに電話をかけた。

何度も何度もかけた。

だけど、ユキの声を聞くことはできなかった。

あの日のことを思い出す

遠い記憶が甦る……

ユキが僕の前から突然消えたあの日……

繋がらない電話に、僕の心は消えそうになった。

僕は、朝食を用意しようと立ち上がり、冷蔵庫を開けた。

……！！！！！！

僕は、大声で泣いた。

「うう・・・ユキ・・・ごめん・・・ユキ・・・」

冷蔵庫の中にチョココンと置いてあったのは、ケーキの上に乗せようとユキが作ったプレートがあった。

ホワイトチョコの上に、チョコペンで書かれた『祝　4周年！！ハルLOVE』の文字。

僕は、車に飛び乗り・・・無我夢中でユキの家へと車を走らせた。

・・・どうか、会えますように・・・

時計は、AM9時ちょうど。

ラジオからは、懐かしいメロディが流れ出す。

高校の時、ユキがハマってたドラマの主題歌だった。

僕に歌って欲しいとせがむので、必死にカラオケで練習したっけ。

2人きりのカラオケボックスで、僕の歌ってる姿を何枚も携帯のカメラでパシャパシャ撮ってたな・・・

ユキの携帯の待受が、歌ってる僕の写真になってることに気付いた

時すごく恥ずかしかつたけど、嬉しかった。

ユキは、いつも僕を褒めてくれた。

僕をヒーローにしてくれた。

ユキ、僕はどうかしていた。

見えないくらい小さいけど、僕はユキじゃない女の人へ好意を持ってしまった。

だけど、僕が愛しているのは、これまでもこれからもユキだけなんだ。

ラジオから流れるその曲は、今でもユキの着うただった。いつまでも変わらない気持ち。

僕は、車の免許を取って初めてユキの家に来た日を思い出す。

そっぴや・・・あの時2度目の告白をしたっけ。

またこんな風に3度目の告白をしにくるなんて、僕は情けない男だ。

もう最後にしよう。

ユキに謝るのは、これで最後。

『ピンポーン』

ガチャ・・・

「あら〜？いらっしやい。どうしたの？」

出てきたのは、ユキのお母さんだった。

「ユキさん、いますか？」

僕は、もし帰ってなかったらどうしよう不安になった。

「え？ハル君と一緒にじゃないの？うちには、もう1週間以上顔出してないけど・・・何かあった？」

「・・・すみません。ちょっとケンカしちゃって。多分ユミちゃんとかだと思えます・・・。」

「ケンカなんて珍しいわね。ユキは、怒ると怖いからちゃんと大事にしてもらわないと・・・。私からも連絡しとくわ。ごめんね、わざわざここまで・・・。」

僕は、車の中でユキへの気持ちを整理して、改めて、ユキしかいないと思った。

今なら言えた。

だけど、ユキには会えなかった。

それから、僕の携帯にユキちゃんから連絡が入り、しばらく泊めると冷たく言われた。

僕は、ユキと話したかった。

早くこの気持ちを伝えないと、取り返しが付かないことになりそう
で怖かった。

電話をしても、出てくれなかった。

結局、僕はその日も1人の夜を過ごすことになった。

ユキの作ってくれたクリームシチューの残りを温めながら、ユキへの
気持ちが溢れそうになる。

一口ずつ味わって食べた。

ユキの愛情が伝わってくる……。

ユキは毎日毎日、僕の為にご飯を作ってくれる。

どんな気持ちで僕にご飯作ってくれていたのだろうか。

それなのに、僕はちょっとした好奇心か、興味なのか……

他の女性を女として意識した。

「怒られて、当然か・・・」

僕は、もうバイトをやめるつもりでいた。

バイトを続けている限り、さゆりさんと顔を合わすことになる。

今後、またユキに誤解されたくないし、僕自身ももうさゆりさんを知りたくないんだ。

これ以上、さゆりさんの存在を大きくしたくはない。

僕は、インターネットでバイトを探しながら、携帯を気にしていた。

かかってこないユキからの電話・・・

僕は、学校帰りに寄れる場所にあるガソリンスタンドのバイトを見つけた。

時給も結構良いし、体動かすのは得意だし、愛想笑いもうまい方だ。善は急げ。

早速電話をかけると、後日面接に来るようにと言われた。

こういう時、自然に手が携帯でユキにメールを打とうとしてしまう。

返事がないことはわかっているけど、送信。

学校の近くのカソスタのバイト見つけた。今度面接行ってくる。コンビニは今月でやめるよ。元気がどうか、心配。メールください。

メールの返信を待つのが辛かった僕は、すぐにシャワーを浴びた。

いつもより、熱めのお湯で体中を綺麗に洗った。

僕は、昨日までの自分にさよならしたかったんだ。

シャワーを浴び終わり、期待せずに携帯に目をやると・・・

不在着信1件。

ユキからの電話だと喜んで、着信履歴を見る。

『さゆりさん』

僕の目に映った文字は、自分で登録したさゆりさんの名。

どうして、こんな時に電話なんてかかってくるんだろう。

生まれ変わった僕を、振り回すのはもうやめてくれ。

僕は、冷蔵庫からユキの作ってくれた麦茶を出し、グラスに注ぐ。

絶対にかけて直さない、と心に決めた僕だった。

しかし、もしバイトの事だったら・・・等と頭の片隅で誰かがささやく。

もう寝るしかないか。

僕は、一人ぼっちのベッドに寝転んだ。

その時、再び携帯に着信。

ユキからの電話は、音楽を変えてあるからすぐわかる。

きつと、さゆりさんからだ。

寝たふりをしようと、電話には出なかった。

しかし、それから何度も何度も1分もしないうちに電話があった。

何か急用かもしれないと、僕はベッドから起き上がり、電話に出た。

『もしもし・・・』

『じん君？・・・お願い。今から会えない？』

電話の向こうで、さゆりさんは泣いていた。

何があったか知らないが、僕に頼るのはお門違いだ。

僕に彼女がいることも知っていて、どうして僕に電話をかけるんだ？

『ごめん。無理ですよ。もう11時だし、僕も困る。』

『・・・お願い・・・。少しでいいから。コンビニの横の公園まで来て・・・』

僕は、女の人の涙に弱いのか、結局はさゆりさんを放っておけなかったのか・・・

ジャージ姿のまま、走って公園へ向かった。

走りながら、自分を正当化するためにいろんなことを考えた。

あの泣き方は、ただごとじゃない。

きつと、大変な事件に巻き込まれたんだ。

もしかしたら、変質者に追われているのかも知れない。

とか。

僕は、あと一歩というところで断りきれなかった。

あの時、ユキからメールの返信があつたら、僕は絶対断つてた。どんなにお願いされても、突き放すことができたと思う。

この自分の甘さを後悔してももう遅かった。

「どうしたんですか・・・？」

僕は、薄暗い公園のベンチに座るさゆりさんを見つけた。

出勤前であることをうかがわせる服装と髪型だった。

紫のワンピースが、公園の灯りに照らされていた。

「じゅめん・・・！！」

！！！！！！

さゆりさんは、僕を見つけるとすごい勢いで僕に抱きついた。

細い体が、震えている。

僕は、何がなんだかわからないまま、さゆりさんの肩に手を回した。

この状況で、他にどんな行動ができるというのか。

「何があつたんですか？」

僕は、さゆりさんを落ち着かせる為にも、動揺を隠しながら声をかけた。

「あたし・・・何も・・・してないのに・・・。お金なんて・・・盗んで・・・ないのに・・・」

僕は、泣きながら話すさゆりさんの聞き取りにくい声を必死で聞き取る努力をしていた。

「え？お金？？どづいづこと？」

僕は、さゆりさんの肩を強く握り、顔を覗きこんだ。

「てん・・・ちようが・・・」

店長・・・その言葉を聞いて僕は状況が理解できた。

店長は、店のお金が合わないといつもぼやいていた。

店の休憩室にまで、隠しカメラを仕込む用意をしていた。

たまたま、僕のバイトの時間の後に店長が入ることが多かった為、僕に疑いの目は向けられなかった。

おそらく、さゆりさんが疑われたのであろう。

「僕から、店長に話しますよ。僕は、いつもさゆりさんの後に入ってたから、さゆりさんがそんなことしてないってわかります。それに、みんな友達が来たら、安くしたりって当たり前のようにしてたから、ピタッと合うなんて無理なんですよ。」

さゆりさんは、潤んだ目で僕を見上げた。

「・・・じん君・・・。あたし、じん君しか頼る人いなくて・・・みんな・・・どこかで・・・あたしのこと、信用してくれてない・・・だから・・・ごめんね・・・。」

「いいよ、そんなの。大丈夫だから安心してください。」

僕は、さゆりさんを抱きしめている自分に、ハッとした。

「あ、僕今から店行って来ます。店長まだいるでしょ？」

僕は、これ以上さゆりさんと一緒にいるのが怖かった。

僕は、胸の高鳴りを自覚してしまった。

僕は、さゆりさんを自分の意思で抱きしめていたんだ。

「いけないで・・・お願い。まだここにいて・・・。」

第6話（キス）

行かないで、とさゆりさんは僕の胸に再び飛び込んできた。

振り払うことはできない。

僕には、この震える細い腕を振り払うことなんてできないんだ。

「・・・警察に、通報・・・するぞって言われたの・・・」

「え・・・？警察？店長頭おかしいよ。さゆりさん犯人じゃないのに・・・」

「水商売の・・・女はこれだから、厄介なんだって・・・言われた・・・」

僕は、ここまで泣きじゃくる理由がわかったような気がした。

そういう言い方は、水商売で働いている人にとって、とても傷つく。

「じん・・・くん。お願い・・・あたし・・・彼女いてもいいから・・・」

「え??何?さゆりさん・・・しっかりして・・・」

思わぬ発言に、動揺する僕の言葉を遮るように・・・

さゆりさんの唇が

僕の・・・唇に

重なった。

僕は、金縛りに遭ったように身動きが取れなくなっていた。

ただ、目の前にいるさゆりさんを見ることしかできなかった。

とても、短いキスだったと思う。

僕には、とても長く感じられた。

その間、頭の中をさまざまな気持ちが駆け巡っていた。

その時、頭に浮かんだこと・・・

タケとユキのこと。

ユキの言っていたことがわかった気がした。

キスをされながら、僕が思ったことは

『ちがう』

違う。違う。全然違う。

これはキスじゃない。

ただの、肌と肌の触れ合いだ。

手が触れたのと同じことだ。

キスではない。

僕が求めているのは、ユキだけだと心から思った。

ここまで来て、やっと心から気付いたなんて遅すぎる。

さっきまで、さゆりさんにときめいていた僕は、今の僕から見ると汚れてる。

「彼女……いてもいいから、支えになってほしいの……お願い。」

さゆりさんは、僕の腰に手を回した。

慣れた手つきで……。

大抵の男は、これでさゆりさんに落ちるのかもしれない。

だけど、僕はそんな手馴れた誘惑で、過ちを犯したりはしない。

さっきのキスのおかげで気付いたよ。

「ごめん。僕、そういうのキライだから……。浮気とか、二股とか、そんなの理解できないから。僕じゃ、さゆりさんを支えることはできないです。」

僕は、ゆっくりとさゆりさんの腕を僕の腰から離れた。

「店長に、話してきます。あ……僕バイト今月でやめるんで……。」

さゆりさんは、呆然と立ちすくみ、僕を見つめていた。

「じん君……お願い。今夜だけでもいいの……。」

そういうことか。

さゆりさんは、とても知的で頭も良く、面白くて人気者だけど、とても寂しい人なんだ。

たった一晚、寂しさを紛らわせてくれる男は、さゆりさんを幸せに

はしてくれない。

「さゆりさん、もったいないよ！！自分の体と心、もっと大事にしてよー！」

僕は、その後店長と話した。

店長の言いたいことは伝わったが、さゆりさんが気に入らないと言
うのが疑った理由だった。

今の店長が、このコンビニの店長になる前から、働いていたさゆり
さんはいつもみんなのリーダー的存在で、バイトの連中も店長の言
うことより、さゆりさんの言うことを聞いていた。

さゆりさんは、たまに店のタバコを吸っていたらしい。

それだけの理由で、1人の女性の生き方を否定するような発言で、
傷つけた。

「わかったよ。もう・あいつが盗んだんじゃないって。みんなの
少しずつの気の緩みが原因だろう。一つくらいいいだろう、って全
員がそういう考え方になってる。俺がなめられてんだよ。」

店長は、僕が辞めたいと言うと、とても残念そうな顔をした。

僕だけが、店長と唯一ちゃんと会話できるバイトだったらしい。

僕は、家に帰り、もう一度シャワーを浴びた。

こんな経験はもう二度としたくないと思った。

こんなに悲しいキスはもう嫌だ。

ユキへの申し訳ないと言う気持ち。

自分自身への苛立ち。

どうしようもないモヤモヤした気持ちでなかなか寝付けなかった。

一方的なキスだったとは言え、ユキ以外の女性とキスをしたことは消せない事実。

ユキに会わず顔がない。

迎えに行く気分にもなれない。

ユキの目を見て、謝る勇気がない。

ユキからのメールも電話もないまま、3日が過ぎた。

僕は、一日一回メールを送っていた。

ユキちゃんから電話があった。

『ユキ、ハル君の話も聞かずに飛び出したこと、すごく後悔してる。だから、もう少し待ってあげて。気持ちの整理付いたら、ちゃんと向き合おうと思うから。』

僕も同じ気持ちだった。

もう少し時間が欲しい。

ユキに会えないのは、僕への罰だ。

揺ぎ無いと信じていた僕のユキへの愛が、少しでも揺らいだ罰だ。

バイトは、結局今月と言わず、その日で辞めた。

携帯のメモリーに、『さゆりさん』はもうない。

僕は、ここところ夜になると外へ出て、星を見ていた。

なあ、ゆうじ。

僕の行動全部見てたんだろ？

怒ってくれよ、ゆうじ。

僕が間違っていた。

なあ、ゆうじはどの星なんだ？

ゆうじの声が聞きたい。

ゆうじの笑顔が見たい。

ゆうじ、教えてくれ。

これから、僕はどうしたらいい？

その時、一番明るく光る星がキラキラと瞬いた。

『大丈夫だよ、ハル君』

ゆうじの声が聞こえた気がした。

第7話（空からの贈り物）

翌朝、冷蔵庫に何も無いことに気付いた。

僕は、少し肌寒い朝の風に当たりながら、コンビニへ向かおうとした。

そうか。

僕の家から一番近いコンビニって僕のバイトしてたコンビニ・・・

さすがに辞めてすぐは行き辛い・・・。

僕は、車で10分の実家へと食料を調達に向かった。

金曜日の午前8時。

出勤途中のサラリーマンや学生がやたらと多い。

自転車のマナーって相当悪い。

どれだけ無敵だと思っているのだろうか。

信号待ちの僕の車の間をスルスルと通り抜ける。

青になっても自転車が邪魔で、動けない。

空腹の今の僕には長すぎる30分の道のり……。

「ただいま・飯・食わせて〜」

突然帰ってきた情けない顔した僕を見ても、いつもと変わらずいつてきますのチューをしようとしてる僕の両親。

「あら???どうしたの?」

「ハル、ユキちゃんに捨てられたか?」

僕は、テーブルに置いてあった懐かしい母の味、卵焼きをほおばった。

「あ!そうそう!あんに、ドラえもんが届いてたわよ。」

「ドラえもん??何それ?」

「さあ、お母さんにもわからないわよ。電報だと思っけど。誰からもわからないの。」

「僕に電報??」

「メールしようと思って、忘れてたわ。ちょうど帰ってきて良かったわ。」

僕は、自分の部屋のベッドにちょこんと座るドラえもん電報を見つけた。

誰からだろう？

心当たりがない。

頭の中で、電報の送り主を考えながら、部屋をぐるぐると歩いた。

期待と不安で、動悸が激しくなる。

僕は、ドラえもんの持つ筒の中の紙をゆっくりと伸ばした。

そこに書かれてあるメッセージを目にした僕は、転がるように階段を下り、急いで車に乗った。

ユキの学校までどうやって運転したのかも思い出せないくらい、僕は無我夢中だった。

僕は、涙がこぼれていることも気付かず、ただユキの元へ向かった。

そこに書かれてあるメッセージ・・・

僕とユキとの4周年記念を祝う電報だった。

「ユキ!!!!!!」

食堂で、ユキを見つけた僕は、ユキの腕を掴んだ。
ケンカ中だということも頭から抜けていた。

ユキの手を引つ張りながら、人気のない場所まで走った。

ユキは、何があったのかわからない表情で、僕に笑いかける。

「ハル?どうしたの??」

「ユキ・・・大変だ。僕に電報が届いたんだ・・・」

僕は、両目から大粒の涙がこぼれていることに気付いた。

僕は、その電報のメッセージを黙って、ユキに渡した。

しばらく、ユキはそのメッセージを眺めた後、急に地面に座り込んだ。

「うわあああ・・・ん・・・うううう・・・ハル・・・」

ユキは、子供のように泣き出した。

それは、天国からの手紙だった。

僕らの親友、ゆうじからの電報だった。

いつ、どうして、この電報を送ったのか。
今となっては、ゆうじには聞けないのでわからない。

でも、自分の命の終わりを予感したゆうじが、僕とユキの未来へメ
ッセージを送ったんだ。

ゆうじがこの世を去ってから、半年が過ぎた頃、僕らは再びゆうじ
によって救われた。

仲直りのきっかけを見つけれられず、お互いに意地を張り続けていた
僕らにゆうじが手を差し伸べてくれたんだ。

『4周年記念おめでとう!!』

ハル君、ユキちゃん仲良くしていますか？

ケンカはしていませんか？

僕は、ハル君とユキちゃんのおかげで歌が作れたんだ。

ありがとう。

だから、いつまでも僕の理想の2人でいてね。

僕はいつでも2人を見ています。

永遠の親友、ゆうじより
『

ゆうじ・・・

またお前に借りができたな。

ゆうじ・・・

これからも、僕の人生にお前は必要なんだ。

ゆうじ・・・ ありがとう。

第8話（ひまわり）

小さな雲がいくつも空に浮かんでいた。

秋らしい、涼しげな雲が楽しそうにかけっこしていた。

「ごめんな、ユキ・・・」

高校時代よく2人で行った、高台にある公園へ出かけた。

ユキは、雑草をくるくると指に巻きつけて遊んでいる。

「ゆうじ君、きつと見てたんだね。」

ユキは、その雑草をパツと空へ投げた。

風に乗る、舞い上がるその雑草を見つめながら、ユキは僕の足に手を置いた。

「バカなことしてる私達を見て、なんとかしなきゃって思ったんだよ。」

ユキは、草の上に寝転んだ。

僕もつられて、寝転んで空を見上げた。

「ゆうじは、本当に僕らを見ているんだな。」

僕は、ユキの手を握り、雲の動きを眺めていた。

「ごめんね。ハル・・・私、最低だった。ちゃんと向き合うこともできなくて・・・」

「僕こそ、本当にごめん。怒って当然だよ。ユキの家にも行ったんだけど・・・会えなくて、もうどうやって仲直りしていいかわかんなかった。」

「そこに、ゆうじくんの電報が来たってわけね。」

ユキは寝そべりながら、僕の方に体をひねった。

「多分、僕らがケンカしたあの4年目の日に、届いてたんだ。実家に届いてたから、今日僕が実家に帰って気が付いたんだけど。これもゆうじの演出かな・・・」

僕は、ここ数日間のことをユキに話した。

ユキが出て行った後、ユキのメールを見たこと。

ユキが冷蔵庫に残した、ケーキに乗せるはずだったプレートを見て泣いたこと。

さゆりさんがお金を盗んだと疑われて、僕に頼ってきたこと。

僕は、さゆりさんのことをもう何とも思っていないこと。
バイトをやめたこと。

そして、僕はばかだったってこと。

僕は、ユキを愛している。

もうユキを泣かせない、と仲直りのキスをした。

ユキは、僕と離れている間、泣いてばかりいたと言う。

僕からの電話に出なかったのは、他に好きな人ができたと言われるんじゃないかと怯えていたらしい。

「そんなわけないのにね。ハルは私にゾッコンだもんね。」

「ば〜か。ゾッコンってもう死語だぞ・・・!!」

なんて笑いあった。

ユキが僕のことを、僕が思ってる以上に好きでいてくれることがわかった。

僕は、もうあんな過ちは犯さないだろう。

ユキには話していないけど、他の人とキスをすることはもう一生ないだろう。

あるとしたら、僕とユキのかわいい赤ちゃんと・・・だな。

ユキの提案で、ゆうじのお母さんに会いに行くことにした。

ゆうじの家の庭には、昔のままボールが転がっていた。

また少し痩せたゆうじのお母さんは、ゆうじの部屋へ案内してくれた。

「なんかね、そのままにしてあるんだけど・・・片付けられなくて」

お母さんの気持ちは手に取るようにわかった。

僕もユキもそのままの部屋を見て、すごく嬉しかった。

部屋に飾られてある写真の方へ近づいた。

ゆうじがいつか話してくれたように、僕との2人の写真が飾ってある。

すごくいい笑顔をしてるゆうじ。

他にも、クリスマスパーティーでの写真や、路上ライブの写真があった。

その写真に隠れるようにして一枚の写真を見つけた。

それは、ユキの写真だった。

優しい笑顔で笑っているユキの写真・・・

もしかして・・・と長年思っていた僕の気持ちは今確かなものになった。

写真の裏には、詩が書かれてあった。

『 ひまわり 』

君は僕の太陽

僕はひまわり

いつも君を見ている

いつも君を見守っている

初めての恋の味

少し切なく、とても甘い

初めての恋の味

君が教えてくれた

僕はひまわり

ただ

君を見てる

君が誰かを愛しているその横顔が好き

君が愛した人は 君を幸せにする

君がいつも いつまでも

笑っていられるよう

僕は

近くで

遠くで

君を見守る

君は僕の太陽

その笑顔の先に 幸あれ

第9話（恋）

気付いていなかったという嘘になる。

今思えば・・・

なんとなく、ユキに向けられる笑顔を感じていた。

でも、確信はなかったんだ。

僕は、素直に嬉しかった。

ゆうじも、恋をしていた。

そのことがとても嬉しかったんだ。

恋をしないまま、ゆうじは天国へ行ったと思っていた。

でもゆうじは、恋をしていた。

短い一生を終えたゆうじは、恋のときめきや切なさ、あのきゅんと

するキモチを知っていたんだ。

ゆうじの書く詩は、とても清らかで心に染み渡る。

恋を知っていたから・・書けたんだ。

何気なく向けられていたユキへの視線を、思い出す。

ゆうじ、お前のユキへの気持ち、しっかり受け取った。

お前の分まで、ユキを大事にするからな。

お前に負けないように、ユキを愛し続けるから・・。

どうか、いつまでも見守っていてくれ。

「私・・全然知らなかった・・」

ユキが気付かないのも当然と言えば当然だった。

いつも、僕とユキを応援して助けてくれていたゆうじがユキを好き

だなんて……。

ゆうじにとって、身近に現れた初めての女性だったのかもしれない。

ゆうじは、僕の隣にいるユキを好きになってくれたんだ。

ユキも同じことを言っていた。

「ゆうじ君が、好きになってくれたのは、ハルを好きな私……だよ
ね。」

ユキは、キラキラとした目でその写真を眺めていた。

素敵な笑顔をしているその写真。

いつまでも、その笑顔を失わないで……

ゆうじの気持ち伝わってくるようだった。

「あの詩……めっちゃめっちゃ良かったよな……。」

帰りの車の中で、僕はポツリと呟いた。

ユキは、さつきからずっと何かを考えているようだった。

窓の外を眺めながら、遠い目をした。

「うん。一生、大切に心の中にしまっておきたい詩だった。私にはもったいないくらい・・・」

「ゆうじがユキをわかってたってことだな・・・。僕も、ユキは太陽だって思うよ。」

ユキは、優しく微笑んでまた窓の外に目をやった。

「今、ゆうじ君と話してたんだ・・・。雲の上からこっちを見てるみたいで・・・。私を好きになってくれてありがとうと言ってたの。」

ユキは、一筋の涙を流し、雲を見つめた。

信号が赤に変わり、僕も雲の隙間から差し込む光の中にゆうじを見つけた。

ゆうじ、ユキを見守ってくれよ！

僕、絶対に幸せにするから・・・

第10話（もう泣かない）

この日をこんな気持ちで迎えることができるとは思わなかった。

快晴の青空の下、僕らはライブ会場へと急ぐ。

いわし雲が広がるさわやかな空は、僕たちのようだった。

僕とユキ。

シンと奥さんになる人。

ユミちゃん。

水野さんとみずきさん。

そして、教習所で出会った仲間達。

寛太は、大きくなった愛ちゃんを嬉しそうに抱いていた。

山之上さん親子も、来てくれた。

みんな、多くを語らず、ただ、時間が来るのを待っていた。

センター1列目。

こんな特等席を用意してくれた大野君は、この日を楽しみにしつつ、来なければいいとも思っていた。

乗り越えた壁は、大野君の自信となるだろう。

映像のゆうじとの対面。

緊張が走る。

会場にブザーが鳴り響き、開演アナウンスが聞こえた。

ゆきと僕はしっかりと手をつなぎ、息を飲んだ。

真っ暗なステージに、白いスライドが下りてくる。

そこに映し出されていたのは、僕たちの大好きなゆうじだった。

「こんにちは・・Spring Snowの大野です。今日は、久しぶりのゆうじとのライブ、楽しんでいってください。」

僕たちのよく耳にする曲たちが、ゆうじによって歌われる。

大野君は、ギターのための演奏でまるでゆうじがいるかのように、ゆうじに視線を送る。

映像の中のゆうじが笑う度、胸の奥が締め付けられるようだった。

そこにゆうじが帰ってきたような錯覚に襲われる。

叫び声のような泣き声が響く。

ただ大野君はギターを弾き、涙をこらえていた。

5曲目の『絆』を終えた時、大野君がマイクを握った。

「僕は、歌うことが怖かった。ゆうじがいなくなった今、もうsp

ring Snowではないと自分で感じていた。ゆうじがいてそのバンドだった。でも、僕は歌うことに決めました。」

大野君は、静まり返る会場を見渡し、最後にゆうじの笑顔にこう言った。

「ゆうじ、お前が僕に歌をくれたんだ。お前の作った歌は・・・多すぎる。僕が、これから歌っていったとしても、何年先までもお前の歌で歌えるくらいにな。」

そして、大野君は静かにステージの袖へ下がった。

みんなのすすり泣きが聞こえ、その泣き声がまた胸に響き、泣きそ
うになる。

そして

映し出されたのは

ゆうじからのメッセージ・・・

病室から、僕らへ向けられたメッセージが

流れ出す

「みんな！！元気？

このビデオレターをみんなが見ているということは、僕はもういないだね。

僕は、僕がいなくなった後のみんなが心配で仕方ないよ。

僕は、幸せだった。

後悔はしてない。

僕の人生は、みんなに負けなくらいに中身の濃い楽しい人生だった。

だから・・・今日限り、泣くのはやめて。

僕を思い出してくれるときは、みんな空を見て

笑って欲しい。

僕は、病室で、たくさんの歌を作ってる。

僕のいなくなったSpring snowで大野君が歌い続けられることを

信じて・・・

大野君の声は素晴らしい。

照れ屋さんだから、なかなか歌わないけどね。

僕が歌いたかったけど、歌えないので

大野君に託します。

聞いてください。

僕の親友と、その彼女へ捧げる歌です。

『僕』です。

「

涙が止まらない僕たちを置き去りにして、どんどん話すゆづじ。

おい、ゆづじ。

僕らは、お前の笑顔を見ると

まだ・・・泣いちゃうよ。

☐ 春が好き

春が好き

新しい始まりの鐘がなる

新しい笑顔に出会う季節

春は人を明るくさせる

春は笑顔を運ぶ

僕は春がすき

雪が好き

雪が好き

真っ白な気持ちを届けてくれる

心の中を風が吹き抜ける

雪はみんなの笑顔

雪はそつとささやく天使

僕は雪がすき
』

大野君の歌う歌も・・・

心に染み渡る。

ゆうじの気持ちが変わったような

そんな顔してた。

ありがとう！...！ゆうじ。

僕とユキを愛してくれて

ありがとう！...！...！

僕は、もう泣かないと決心した。

第11話（新しい扉）

ライブの後、集まったみんなの顔は

ライブ前とは違って見えた。

それから、僕らは

少しずつ

少しずつ

強くなるうと 頑張った。

水野さんは、また病院に運ばれた。

原因は、無理に薬をやめた事による禁断症状。

そろそろ子供が欲しいというみずきさんと水野さんの想いが伝わる。

薬を手放せなかった水野さんをそのような行動に駆り立てたのは

ゆうじのメッセージかもしれない。

今回、水野さんの行動は逆効果となってしまったが

決して無駄ではなかったと思う。

2人の絆はより深まり、焦らずにゆっくり病気と向き合おうと心に誓ったという。

シンは、新しい生活を始め

どんどん大人の顔へと変わってる。

サッカーとエッチなことしか頭になかったあいつは

もういないんだ。

夜中までバイトに励む姿は、僕や周りの奴らに大きな影響を与えた。

僕もとにかく働いた。

眠気と戦いながら深夜のガソリンスタンドで毎日働いた。

きっと 今しか経験できないから。

このきつい毎日も

いつか 懐かしく思い出すときがくるんだ。

ユキとの結婚まで秒読み段階に入り、今まで親に頼ることしか考えていなかった僕も

真剣に貯金を始めた。

今更遅いと、言われるけどね。

朝方家に帰ると、寝返りを打つユキが待つ。

その布団にもぐりこみ、僕も数秒で眠りにつく。

こんな忙しい毎日の中にも

幸せや感動や喜びがたくさんある。

辛いときには空を見上げて

ゆづじに語りかける。

この日々は今しかない。

ゆづじがいなくなった悲しみをなかなか消すことができない僕は

ただ・・・がむしゃらに働いて時間が解決してくれるのを待つ。

みんなそうなのかもしれない。

ゆうじに

負けないように

みんな必死でもがきながら

前に進もうとしていた。

いつの間にか雪の降る季節が近づいていた。

僕とユキは、結婚式の準備とバイトと勉強に追われる毎日。

だけど、幸せだった。

同じ目標に向かって、ユキと努力することが幸せだった。

不思議な気持ちだった。

最近なぜか、ユキと出逢った頃をよく思い出す。

夢にも見るんだ。

ユキを初めて見た時のあの胸のときめき。

初めて声をかけたときのあの勇氣。

ユキの涙の訳を知った時のショック・・・

ユキがいなくなった日のこと。

初めてのキス。

やっと結ばれたあの日のこと・・・

僕の青春。

ゆうじに会いに行った日のこと。

僕が事故に遭った日のこと。

歩けなくて、壁を殴った日のこと。

水野さんが倒れた日のこと。

思い出には、ユキの笑顔が必ずついてくる。

僕が辛いときも嬉しいときも

そばで支えて 笑わせてくれる君は

今も僕の天使だ。

これから

一生僕はユキと生きていく。

ユキを支え、ユキを幸せにできるのは僕しかない。

そして、僕もユキにしか癒されない。

この運命的な出会いをくれた神様は

残酷にも僕の親友を天国へ連れ去ってしまった。

どうか

ゆうじが

天国で笑っていますように……

第12話（バージンロード）

ゆっくりとゆっくりとバージンロードを歩く姿を目に焼き付ける。

そこは、まるで

ユキとお父さんの生まれてから今までの長い道のようだった。

いろんなことがあったね…

たくさん泣いたね、ユキ。

何度もお父さんを憎んでしまいそうになり、

何度もお父さんを許してきた。

お父さんの目には涙が溢れてた。

たくさんの後悔と反省…そして、ユキへの愛。

僕は、誓う。

もう泣かせないと・・・

お父さん、あなたの大事な娘さんを僕が一生大事にします。

そして、お父さんとお母さんのことも

本当の両親のように大切に思います。

ユキ、いろんなことがあった分、僕らは強くなれた。

もう迷わない。

もう見失ったりしない。

大事な人は、君なんだ。

ユキがいて、僕は生きていける。

ユキがいて、僕は笑える。

これから、僕達にどんな未来が待っているんだろうな・・・

明日から出発する新婚旅行で、いきなり赤ちゃんができちゃうかも
知れないよ。

最初で最後の新婚旅行、僕達はきつとおみやげを買い過ぎてしまっ
たろう。

今まで僕とユキを支えてくれたたくさんの人に感謝の気持ちでいっぱいだ。

僕とユキが今日この日を迎えることができたのは

たくさんの愛情のおかげ。

僕達を見守ってくれる人々のおかげで

僕達はやっとこの日を迎えることが出来た。

だけど、ここがゴールじゃない。

まだスタート…

聞こえるかい　あの鐘の音

聞こえるかい　あの笑い声

春の日も、雪の日も隣で笑いあう君と僕

出逢ってから　全てのページが宝物

君との時間　天使のくれた時間

僕を信じて　僕を見つめて

僕は君のために生きてゆく

僕は何にも負けない強さで君を守る

永久に誓うよ　forever

覚えてるかい　教室の光

覚えてるかい　カーテンのぬくもり

春の日も、雪の日も隣で笑いあう君と僕

出逢ってからの 涙 笑顔 全部抱いたまま

君との時間 天使のくれた時間

僕を愛して 僕についてきて

僕は君のために生きてゆく

僕は何にも負けない強さで君を守る

永久に誓うよ forever

「おめでとお〜!!! ユキちゃん、ハルっぺ!!!」

「綺麗だよ、ユキちゃん!!!」

「ハルって七五三みたいだね〜!!!」

「ユキ・・・綺麗だよ。」

「ハルも素敵だよ!!」

永遠の愛を誓った僕らは

青い空の下

花びらを

思いっきり空へ投げた。

ゆうじが僕とユキの為に作ってくれていた結婚ソング。

披露宴でMDから流れるその歌を聞いて、

涙が溢れた。

僕はテーブルの下で

しっかりとユキの手を握る。

ゆうじ……届いてるよ。

お前の歌。

お前の気持ち。

今、お前はここにいるんだ。

遅くなっちゃったけど、

やっとこの日を迎えることが出来たから・

心配かけたな・・ゆうじ。

もうお前に心配かけないように

2人で生きていくから。

だから、これからも僕らのこと

ずっと

見守っていてくれよ。

窓から見える空は、とても青く澄んでいた。

僕は思い出す。

卒業式に見た空を・・・

あの日、春の雪と桜に誓った約束を・・・

みんなの笑顔が眩しくて目を細める。

ユキが笑う。

「ハル・・・今日の夜頑張っちゃっう?」

相変わらずのユキに、僕は安らぎを感じる。

僕らは決めていた。

いつか生まれる僕とユキの子供の名前・・・

ゆうじのように優しい強い心を持った人になってもらいたい。

男の子でも

女の子でも

『悠』

僕とユキはみんなの笑顔と拍手の中を

歩きながら囁き合う。

絶対幸せになるうな．．

空には大きな雲がひとつ

浮かんでた。

その雲が

『おめでとう！！ハル君、ユキちゃん！！』

そう言って

ふわふわと揺れながら

消えていった。

第13話(空からのメッセージ) - 完 -

桜舞い散る季節

僕ら互いに見つめあい

永遠の愛を歌う

出逢ってから

いくつもの涙

笑顔見てきたけど

僕にとっての君はいつも天使なんだ

君と過ごしたあの夏の日も

君とけんかした秋の日も

信じあえる愛があるから

君の笑顔

胸に抱くよ

いつもいつまでも

君に会えなくなつた今でも君はここに
いる

僕は永遠に君を待つ

僕に舞い降りた天使

雪のちらつく季節

僕ら互いに愛し合い

永遠の愛を歌う

出逢ってから

いくつもの涙

笑顔見てきたけど

僕にとっての君はいつも天使なんだ

君と過ごしたあの雪の日も

君を泣かせたあの夜も

信じあえる愛があるから

君の笑顔

胸に抱くよ

いつもいつまでも

君との新しい日々
これから輝く未来

僕は永遠に君を愛す

僕の心を癒す天使

ゆづじ・・・

見てるか？

おい、お前の歌まだみんなの心に響いてるよ…

お前がこの世を去って10年が経った。

今頃見つかったお前のデビュー曲の『Spring Snow』の
2番の歌詞。

今度は、大野君が一人でCDを出すことになった。

あれから10年経ったけど、誰もお前のこと忘れてないんだ。

みんなあの頃の気持ちに戻るんだ。

空を見上げるたび、

夕日を見るたび、

今もお前は僕達の心に語りかけるんだ。

「パパ〜！ゆうじのお墓にお花いっぱいだよお〜！」

「ほんとだ！！ハル！！すごいお花の数！早く来てよ〜！！！」

僕の手を引く張る大事な2つの手…

僕のかげがえのない家族。

愛する愛する大事な人…

僕と、ユキと、悠…

3人で真っ青な空を見上げた。

そして、大声で空に叫んだ。

「ゆづじーーーー!!!」

お墓の周りの雑草を抜くかわいい我が子の姿を見ながら、

僕はユキの手を握った。

第13話（空からのメッセージ） - 完 - （後書き）

どくんどくんシリーズを最後まで読んでいただきまして誠にありがとうございます。

私が人生で最初に書いた小説であり、ハルとユキには大変感情移入してしまっています。

この作品に込めた想いを少しでもたくさんの方に感じ取ってもらえると嬉しく思います。

感想やアドバイスなど頂きながら、なんとか最後まで書き上げることができました。

今後は修正など加えながら、まだまだ成長させていきたいと思っています。

最後になりましたが本当に最後まで読んで頂きましてありがとうございます。

「JJJ」報告なんですが…

別のサイトの小説ですが、

『日本ケータイ小説大賞』の大賞を頂くことが出来まして、出版することが決まりました。

どくんどくんではないですが、そちらも女の子目線で、愛情たっぷり書いたのでぜひ読んでもらえると嬉しいです。

今後とも私と私の作品をよろしく願います。

r e y

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1600c/>

どくんどくん3 ~僕達の道標~

2010年10月21日09時04分発行